前田本『枕草子』のために（四）

金井利浩

〈キーワード〉枕草子　前田本　諸本論　汎諸本論　再構成本

本稿は、前稿「前田本『枕草子』のために（三）」（本誌第三六号、二〇二三年三月発行）の続稿である。旧来の『枕草子』諸本論において不当に冷遇されてきたと思しい前田本の、該論の説くところとは背離・悖反する諸段を、前稿にひきつづき汎諸本論の視座から取りあげてゆく。

なお、前稿ではいわゆる「『春はあけぼの』の冊」所収の諸段を議論の対象に据えたが、本稿では、「『小白河といふところは』の冊」のうちのそれに向き合ってみることにする。

［凡例］

一、本文は、尊経閣叢刊丁卯歳配本『前田本枕草子』（育徳財団、一九二七年）に拠り、次のような方針によって翻刻する。

1　仮名は現在におこなわれる字体により、漢字は常用漢字表にあるものについてはその字体を使用する。

2　段落を切り、句読を加点する。

3　会話の箇所は「　」でくくり、会話文中の会話は『　』でくくる。

4　仮名には必要に応じて漢字を当て、もとの仮名は読み仮名（ふりがな）のかたちで残す。なお、その仮名が歴史的仮名遣いと相違する場合には、その仮名の直下に（　）でそれを補記する。

5　漢字には、必要に応じて読み仮名を［　］に入れて付す。また場合により、漢字を仮名に開き、もとの漢字を傍記する。

6　漢字が動詞の場合、適宜、送り仮名を補い、その仮名の右傍に圏点（「・」）を付す。

7　当て字の類は、一般におこなわれる表記に改め、もとの当て字はふりがなの位置に残す。

8　仮名遣いは歴史的仮名遣いに改め、底本のありようはふりがなの位置に残す。

9　語の清濁については、近年の研究成果を参照して、これを区別する。
10　反復記号「ゝ」「〳〵」は適宜仮名に改め、当該の記号はふりがなの位置に残す。
二、通釈は、本文の意味するところを現代日本語表現をもって示す。

一七　前田本を読む／前田本で読む　〜三〇一段序盤の場合〜

まずは第三〇一段序盤の本文[1]を見つめるところから始めてみたい。

〔三〇一〕（その1）

【本文】

宮にはじめてまゐりたるころ、もののはづかしう、つつましきこと数知らず、涙も落ちぬべければ、夜々〳〵まゐりて、三尺の御几帳の後ろにさぶらふに、絵など取り出でて見せさせたまふをだに、え手もさし出づまじう、わりなし。「これは、とあり」「かれは、かかり」などのたまはするに、高坏にまゐりたる御殿油なれば、髪の筋なども、なかなか〳〵昼よりは顕証に見えてまばゆけれど、念じて見などす。いとつめたきころなれば、さし出でさせたまへる御手のはつかに見ゆるが、いみじうにほひたる薄紅梅なるは、限りなうめでたしと、見知らぬ里人の心地には、いかがは、かかる人こそ世におはしましけれと、おどろかるるまでぞ、まもりまゐらする。

暁にはとく下りなむとぞ急がるる。「葛城の神も、しばし」な

【通釈】

中宮に初めて参上したころといったら、すべてが気恥ずかしく、気が引けることばかりで、涙までこぼれそうになるので、日々、夜になると参上して、三尺の御几帳の後ろに侍っていると、中宮は絵など取り出してお見せくださるのだけれどそれにさえ、手をさし出せるはずもなく、心の置き所がない。「この絵は、ああなのよ」「その絵は、こうなのよ」などとご説明くださるにつけ、高坏にお灯しした御燈火なので、髪の一本などまで、かえって昼間よりもはっきりと見えてきまりが悪いのだけれど、我慢して見たりする。とても寒いころなので、袖からのぞかせていらっしゃるお手のわずかに見えるのが、実にうるわしい薄紅梅であるのは、この上なくすばらしいと、宮仕え経験のない一般人のわたしの感覚では、どう表現したものか、こんな方がこの世にいらっしゃったのだなあと、自分でも我に返ってはっとするくらい、じっとお見つめ申し上げてしまう。

夜明け前にはすぐに局に下がろうと、つい気が急く。それを看て取った

ど仰せらるるを、いかでかは筋かひても御覧ぜられむとて伏したれば、御格子もまゐらず。女官まゐりて、「これ放たせたまへ」など言ふを、女房聞きて放つを、「まな」と仰せらるれば、笑ひて帰りぬ。ものなど問はせたまひ、のたまはするに、久しうなりぬれば、「下りまほしうなりぬらむ。さは、はや」とて、「夕さりは、とく」と仰せらる。ゐざり下るるや遅きと上げ散らしたるに、雪降りけり。登華殿の御前は、立蔀近うてせばし。雪、いとをかし。

「けふは、昼つ方まゐれ。雪に曇りて、あらはにもあるまじ」などたびたび召せば、この局の主も、「さのみやは籠りゐたまへらむとする。いとあへなきまで御前ゆるされたるは、さ思しめすやうこそはあらめ。思ふにたがふはにくきものぞ」など、ただ急がし出だせば、われにもあらぬ心地すれど、まゐるも、いとぞ苦しき。火焚屋の上に降り積みたるも、めづらしう、をかし。

御前近うは、例の、炭櫃に火こちたくおこして、それには、わざと人もゐず。宮は、沈の御火桶の梨絵したるにむかひてはします。上蔦御まかなひしたまひけるままに、近くさぶらふ。

次の間なる長炭櫃に隙なくゐ並みたる人びと、唐衣脱ぎ垂れたるほど、馴れやすらかなるを見るもうらやましう、御文取り次ぎ、立ち居、行きちがふさまなど、つつましげならず、物言ひ、ゑ笑ふ。いつの世にか、さやうにまじらひならむと思ふさへぞ、つつましき。奥寄りて、三、四人つどひて、絵など見るもあり。

中宮は「葛城の神でも、もう少しは」などとおっしゃるのだが、決して斜めからでもわが顔はお目にかけまいと思って俯伏しているので、お部屋の格子もお上げしない。掃部司の女官が参上して、「この格子をお上げくださいませ」などと言うのを、女房が聞いて開けようとすると、中宮が「上げないで」とおっしゃるので、女官は笑って帰っていった。中宮はいろいろお聞きになったり、みずからお話なさったりすると、「だいぶ時間も経ったので、局に下がりたくなったでしょう。では、もうお帰り」と許して、「夕方は、すぐにまたいらっしゃい」と仰せになる。わたしが膝を折ったまま後ろに進んで退出しようとするやいなや女房たちが格子を次々に上げていると、雪が降ってきた。登華殿のお庭は、立蔀が近くにあって狭い。雪が、とてもきれいだ。

「きょうは、昼ごろ来なさい。雪にかすんで、あなたの姿も顕わになることもないでしょう」などと何度もお呼び寄せになるので、わたしの局を続べる先輩も、「どうしてあなたはそんなふうにばかりこの局に閉じこもり申していようとしているのですか。何ともあっけないくらいに中宮のお側近くに侍ることが許されたのは、そうお思いになるそれだけの理由があるのでしょう。相手が思ってくれているのに背くのは、見苦しいものですよ」などと、ひたすら急きたて向かわせようとするので、我を忘れる思いがするけれど、参上するのは、ほんとうにつらい。火焚屋の屋根の上に雪が降り積もっているのが、目新しく、趣がある。

中宮の近くには、いつものように、炭櫃に火をたっぷり熾して、そこには、ことさら誰も坐っていない。中宮は、沈香木製の、梨地の蒔絵をあしらった火桶にあたっていらっしゃる。上席の女房が、中宮の身のまわりのお世話をなさったその流れで、近くにお控え申している。

次の間にある長炭櫃に隙間もなく並んで坐っている女房たちが、唐衣を抜き衣紋に着ているようすが、物馴れてゆったりしているのを見るのもうらやましく、お手紙を取り次いだり、立ったり坐ったり、行き来したりするようすは気おくれしたふうもなく、おしゃべりをしたり、にこにこ笑ったりしている。いったい、いつになったら、あんなふうにお勤めできるようになろうかと思うのさえ、気の引けることだ。奥の方で、三、四人で寄りあって、絵などを見ている女房もある。

本章段は、三巻本〔一七九〕、能因本〔一八二〕がこれに対応する。堺本には対照すべき章段は非在である。三巻本ならびに能因本との異同については、文脈の趣意を異にせしめるような大きなそれはなく、総じて小異であると言えなくもないが、部分的には、従来の、前田本は能因本・堺本のそれぞれ、あるいは両々から引き写されたとの説明では収まりきらぬ事象として現前していると見られるものもある。具体を見ていこう。

2頁の【本文】、1行目の「もののはづかしう、つつましきこと」、これを三巻本は「もののはづかしきことの」、能因本は「もののはづかしき事」と伝える。見るからに、前田本の独自異文である。

ここで敢えて触れておけば、これ一つにしてからが、右にも陳べた従前の考えによったのでは説明しきれぬ異同であり、であればこそ原・能因本なり原・堺本なりが招来され、説明の補塡、というよりは事実上の辻褄合わせが行なわれてきたのではなかったか。それというのも他ではない、これまでにも縷々強調してきたとおり、「原・能因本」にせよ、「原・堺本」にせよ、それは幻の伝本だからである。その存否を何人も説き明かし得ぬ伝本だからである。そんな伝本をあたかも現存したかのように机上ないし理窟上に招き寄せなければ、従前の解も説明も断じて成り立ちはしなかったことを、今こそ想うべきである。前田本は、そうまでして不当に、と言ってよくなければ必要以上に、貶められてきたのである。

3行目、「見せさせたまふをだに」の「をだに」について、三巻本は「だに」を持たず、能因本は逆に「を」を持たない。また、そのすぐ後の「え手も」を、三巻本は「手にてもえ」、能因本は「手も」と伝える。

4行目、「これは、とあり」「かれは、かかり」を、三巻本は「これは、とあり、かかり。それか、かれか」に作る。また、三巻本は、「のたまはするに」を「のたまはす」で句点とし、「まゐりたる」を「まゐらせたる」と伝える。

9行目、「里人の心地」を、三巻本は「里人ごこち」、能因本は「里び心地」とし、「いかがは」を、三巻本は持たない。

2頁最終行の「とく下りなむとぞ」は、能因本では「とくなど」とだけである。また、次行にかけての「いかでかは筋かひても御覧ぜられむ」の箇所を、三巻本は「いかでかは筋かひ御覧ぜられむ」、能因本は「いかで筋かひても御覧ぜむ」に作り、径庭のありようには微妙なものがある。

3頁の1～2行目、三巻本は「伏したれば」の前に「なほ」を置き、「…言ふを、女房聞きて放つ」を、「…いふを聞きて、女房の放つ」とする。

5行目、「…下りまほしうなりぬらむ。さは、はや」を、三巻本は「おりまほしうなりにたらむ。さらばはや」と伝え、直後の「とて」を持たず、会話文がさらに続く体である。さらに、その続く会話文の始まりも、三巻本では「夕さり」ではなく「夜さり」である。なお、「夜さり」は能因本でも同じである。

6行目、「下るる」は、三巻本では「帰る」、能因本では「かくるる」である。また、三巻本は「上げ散らし」を「あけ散らし」と整定し、「降りけり」は「降りにけり」と伝える。

ところで、能因本は、「雪降りけり。登華殿の御前は、立蔀近うてせばし。」の二文を持たない。これはおそらくは、伝写の或る段階で、或る書写者が、「雪降りけり」の「雪」から、「せばし」の後につづく「雪」へと眼を移してしまったことで、その間の文字列が脱落したものであろう。もしそうだとすれば、これもまた、前田本は能因本もしくは堺本に拠ったのだとする図式を成り立たせるためには、ここに「原・能因本」を招き入れなければならない異同事例ということになるのであろう。

翻って、現・能因本は、すくなくとも本箇所については、前田本は能因本に拠ったとの理窟・理解には何ら与し得ないのである、と明記しておきたい。

9行目、まず冒頭の「けふは」と「昼つ方」とが、三巻本では逆位である。また、三巻本はつづく「まゐれ」の前に「なほ」を置く。「けふは」からの発話でも、「昼つ方」からの発話でも、趣意に差異は無いと言ってよかろうが、前者のほうが、前段の「夕さりは、とく」との中宮の仰せとの聯絡は滑らかと言えようか。ところで、三巻本を底本とする注釈書は、総じて、「昼つ方、『けふはなほまゐれ。……』と、「昼つ方」を地の文として整定するが、「『夕さりは、とく』と仰せらる」からの文脈をふまえれば、「昼つ方」はむしろ発話と把捉して括弧内に置き、「昼ころに、きょうは、やはり来なさい」との意と解すべきであろう。

10行目、「局の主」の「の」を、能因本は持たない。ちなみに、うしろから3行目の「柱のもと」、こちらは三巻本が「柱もと」と、「の」を持たない。たとえば『和泉式部日記（物語）』の冒頭からわずかに読みすすめたところに現れる、三条西家本では「むかしのなごり」と伝える文字列を、応永本は「むかしなごり」としている。[2] これらは、あるいは「の」を補読すべきものとして「局主」「柱本」「昔名残」といったように或る段階で書写されたものが、のちに仮名にひらかれた、その結果ででもあろうか。

10～12行目にかけての「主」の発話については、三巻本が、冒頭の「さのみやは」の前に先ず「見ぐるし。」の発語を置く。また、「籠りゐたまへらむ」を「こもりたらむ」とする。一方、能因本は、「さのみやは」の「やは」を「や」のみ、「籠りゐたまへらむ」を「こも

りゐたまふらむ」とするが、文意の形成には難が伴うであろう。

3頁のうしろから7行目の「宮は…」に始まる一文と次行の「上臈…」に始まるそれとが、三巻本では逆順である。大きな径庭である。

うしろから5行目、「次の間なる」の「なる」は、三巻本・能因本では「に」である。「ゐ並みたる」についても、三巻本・能因本ともに「並み」を持たない。また、「脱ぎ垂れ」を、三巻本は「こき垂れ」、能因本は「着垂れ」と伝える。なお、「脱ぎ垂れ」は、「抜き垂れ」の可能性をも考量すべきではあるまいか。

うしろから4行目、「うらやましう」を三巻本は「うらやまし」として、そこで終止する。また、2行目の「行きちがふ」を能因本は「ふるまふ」とする。これは、直前の「立ち居」に引かれての改変かと思しいが、これなども、前田本が能因本に拠ったと説こうとする場合には、その反証となる事象であろう。

一八　前田本を読む／前田本で読む　〜三〇一段中盤の場合〜

〔三〇一〕（その2）

【本文】

しばしありて、前駆高う追ふ声すれば、「殿まゐらせたまふなり」とて、散りたる物ども取りやりなどするに、いかでおりなむと思へど、さらに身じろかれねば、いま少し奥に引き入りて、さすがにゆかしきなんめり、御几帳のほころびよりはつかに見出でたり。

大納言殿のまゐりたまへるなりけり。御直衣・指貫の色、雪に映えて、をかし。柱のもとにゐたまひて、「昨日、今日、物忌みにてはべれど、雪のいたく降りはべれば、おぼつかなさになむ」と申したまふ。「道もなしと思ひつるに、いかで」とぞ御

【通釈】

しばらく経って、先払いを高らかにする声がするので、「殿が参上なさるようです」と言って、女房たちが散らかっているいろいろな物を片づけなどするにつけ、どうにかして局に下りてしまいたいと思うけれど、まったく身の自由が利かないので、もう少し奥に引っ込んで、それでも我ながらやはり見たいのであろう、御几帳の縫合せの隙間からわずかに覗き見た。

殿ではなく大納言が参上なさったのであった。御直衣や指貫の色あいが、雪に映えて、うつくしい。柱のすぐ近くにお坐りになって、「昨日、今日、物忌みでございましたが、雪がひどく降りましたので、ご身辺が気がかりで――」と申し上げなさる。「『山里は雪降り積みて…』と歌われたとおり『道もなし』と思ったのに、どうして」と中宮のご返事がある、と、大納言がふとお笑いになって、「その歌の下の句が『けふ来む人を』とつづくそのとおりに私めのことを『あはれ』ともご覧あそばすのではと思いまして」

いらへある、うち笑ひたまひて、「あはれともや御覧ずるとて」などのたまふ御ありさまども、これより何事かはまさらむ、物語にいみじう口にまかせて言ひたることどもにも劣らざめるを、とおぼゆ。

宮は、白き御衣どもに、紅の唐綾をぞ奉りたる。御髪のかからせたまひたるなど、絵に描きたるこそはかかることは見れど、現にはまだ知らぬを、夢の心地ぞする。

女房と物言ひ、たはぶれなどしたまふを、御いらへ、いささかはづかしとも思ひたらず聞こえ返し、そらごとなどのたまひかくるを、あらがひ返しなど聞こゆるは、目もあやに、あさましきまで、あいなう面ぞ赤むや。

御くだもの参りなどして、御前にも参らせたまふ。「御几帳の後ろなるは、誰ぞ」と問ひたまふなるべし、「さぞ」と申すにこそはあらめ、立ちておはするを、ほかへにやあらむと思ふに、いと近くゐたまひて、物などのたまふ。まだ参らざりしとき聞きおきたまひけることなど、「まことにや、とありし」などのたまふに、御几帳の隔てよりよそに見やりたてまつりつるだにはづかしかりつるを、いとあさましう、さし向かひたてまつりたる心地、現ともおぼえず、行幸など見るに、車のかた、いささか見おこせたまへるには、下簾ひきふたぎ、透影もやと扇をさし隠すに、なほ、いとわが心ながらもおほけなく、いかで立ち出でしにかと、汗あえていみじきには、何をかはいらへ

などとおっしゃるそのお二人のご様子は、これに勝るものは何もあるまい、物語にただただ口からの出まかせのように語り立てられたすばらしさにも劣らないようだ、と感じられる。

中宮は、白い下着を重ねられた上に、紅の唐綾をお召しになっている。そこに御髪がかかっておいであそばすさまなど、さすがに絵に描いたのであればこのような場面は見るけれど、現実にはまだ見た覚えもないので、夢を見ているような気持ちがする。

大納言は女房たちとお話をし、冗談を口になさったりするのだが、女房たちはそれに対するご返答を、いささか気後れするとも思ったりすることなく言い返し申し上げ、作り話などを持ち出しおっしゃるのに対しては、抗弁など申し上げるのは、目もくらみ、あきれるほどにわけもなく顔が赤らむことだ。

大納言は果物を召しあがりなどして、中宮にもおすすめになる。「御几帳の後ろにいるのは、誰なの」ときっとお尋ねになったのであろう、それに女房の誰かが「誰それで」とわたしの名前を申し上げたのであろうが、座を立ってこちらにいらっしゃるのを、別の女房のところへであろうかと思っていると、わたしのそれは近くにお坐りになって、お話などなさる。わたしがまだ宮仕えに参上していなかった時分にお耳に留めおかれたことなどについて、「ほんとうに、そんなことがあったのか」などとお訊ねになるけれども、御几帳の仕切り越しに離れたところから眺め申していただけでも身のすくむ思いだったのに、まったくあきれるくらい、差し向かい申し上げている感覚は、現実とも思えず、これまで行幸などを見る際に、こちらの車のほうに、ちらと視線をお向けになったときには、下簾の乱れを引き寄せて塞いで、人の姿が透けて見えてしまうのではと扇をかざして顔を隠すほどだったのに、さらにこうして、実にわが心ながら身のほども知らず、どうして宮仕えに出てきてしまったかと、汗がじわじわと出てとんでもない体たらくであっては、いったい何をお答え申し上げられよう。とっておきの陰と思ってかざしていた扇をすらお取り上げになったので、

も聞こえむ。かしこき陰とささげつる扇をさへ取りたまへるに、振りかくべき髪のあやしささへ思ふに、すべて、まことにさるけしきもやつれてこそ見ゆらめ、とく立ちたまはなむと思へど、扇を手まさぐりにして、「絵は、誰が描きたるぞ」などのたまひて、とみにも賜はねば、袖を顔におしあてて、うつぶしたるも、唐衣に白いものうつりて、まだらくらむかし。

顔を隠すべく振りかけるはずの髪の見苦しさまで気になるにつけ、何もかも、まさしくそうした心のうちを映した表情が、大納言にはぱっとしないものとして見えているだろう、一刻も早くお立ちになってほしいものだ、と思うけれど、当の大納言は扇をもてあそびながら、「絵は、誰が描いたのか」などとおっしゃって、すぐには返してくださらないので、袖を顔に押し当てて俯伏したのだが、唐衣におしろいがついて、顔は斑になっているだろうよ。

この中盤についても、三巻本〔一七九〕ならびに能因本〔一八二〕との対照のもと、主たる異同を見てゆこう。

6頁の【本文】1～2行目、能因本は「追ふ声」を単に「音」とし、三巻本は「散りたる物ども」の「ども」を持たない。

3行目、「身じろかれねば」を、三巻本は「えふとも身じろかねば」に作る。一方、能因本は、前行の「いかで」から「いま少し」まで25の文字列をそっくり持たない。その本文のありようを知る術もない原・能因本はそれとして、現・能因本と前田本との距離は、ここでもまた顕在化するばかりなのである。

4～5行目、「見出で」は、三巻本・能因本ともに「見入れ」とする。先の「ゐ並みたる」を「ゐたる」に作るのと並んで、本文伝来に係る、雑纂本対類纂本の構図が想われるところである。

6行目、「色」を、三巻本・能因本ともに「紫の色」と伝える。このありようも右と同断だが、前田本の「色」は、それのみで「紫の色」と同義を表すか。なお、「まゐりたまへる」が能因本では「まゐらせたまふ」とあり、三巻本は、「をかし」の前に「いみじう」を置く。

うしろから3行目、三巻本は、「…にてはべれど」を「…にはべりつれど」、「…はべれば」を「…はべりつれば」に作る。一方の能因本は、「おぼつかなさになむ」の「なむ」を持たず、「…と申したまふ」を「などのたまふ」とする。

前田本は能因本（ないし堺本）から成る――これは真に真たり得るのか否か、なお見つめ続けていかねばなるまい。

うしろから2行目～最終行、能因本は、「いかで」を「いかでか」、「御いらへある」の「ある」を「あなる」とする。

7頁の1行目、引きつづいて能因本は、「御ありさまども」の「ども」が「は」、「これより」が「これよりは」、「何事かは」の「かは」が「か」のみと、前田本との間に幾つもの小異を見せる。

2行目、「…言ひたることどもにも劣らざめるを」を、三巻本は「…言ひたるにたがはざめり」に作る。

4～5行目、「紅の唐綾をぞ奉りたる」は、三巻本では「奉りたる」の前に「上に」を置くといった程度の異同だが、能因本はここを「紅の唐綾二つ、白き唐綾をたてまつりたる」と、大きく異なる体で伝える。これまた、前田本が能因本に拠ったとする把捉への、明らかな反証たり得る事象というべきであろう。また、「…かからせたまひたる」の「たまひたる」は、三巻本・能因本ともにこれを「たまへる」とする。さらに、「絵に描きたる」の直後に両本とも「を」を置く。つづく「…見れど」は、三巻本が「…見しに」、能因本が「…見るに」と伝える。

8～9行目、三巻本は、「のたまひかくるを」を「のたまふは」、「あらがひ返し」を「あらがひ論じ」に作る。

11行目、「参りなどして」の「して」の位置に、三巻本は「取りはやして」との表現を置く。また、「御几帳」を三巻本は「御帳」と伝える。また、12行目、「『さぞ』と申す」を、三巻本は「さかす」とし、「ほかへにやあらむ」を、同じく三巻本は、「なほほかへにや」とする。

見られるとおり、このあたり、三巻本との異同が顕著である。三巻本的なる本文から前田本的なるそれへの改変が、一定の推敲意識のもと、しかも清女自身の手によって為された可能性を問わんとする立場に立とうとすれば、これほど興味深い事象はない。いま仮に、そうした方向・順序での改変を認めるとすると、「あらがひ返し」―「あらがひ論じ」などには語彙の穏和化、「さかす」―「『さぞ』と申す」などには表現の朧化とでも言うべきを指摘し得ようか。

しかるに、三巻本と前田本との異同の傍らで、同じ雑纂本内において三巻本と能因本との径庭はどう説明し得るのか、その疑問は依然としてくすぶり続けている。

うしろから9行目の「参らざりしとき」の「とき」を、三巻本は「より」とし、同じく8行目の「とありし」の「と」は、三巻本が「さ」、能因本が「さや」と伝える。

うしろから7行目、「御几帳の隔てより」を、三巻本・能因本ともに「御几帳へだ（能因本は「隔」）てて」に作り、「見やりたてまつりつる」を、三巻本は「見やりてまゐりつる」、能因本は「見やりたてまつる」とする。

うしろから6～5行目、「たてまつりたる」は、三巻本・能因本ともにこれを「きこえ（能因本は「聞え」）たる」に作る。また、これも両本ともにだが、「車のかた」の後に「に」を置く。

うしろから4行目、「…たまへるには」は、前行につづきこれも三巻本・能因本ともに「…たまへば」と伝える。このあたりまでは、

雑纂本対前田本（類纂本）という対立が顕著である、といえるのだが、以下、能因本対前田本というべき事象、言い換えれば能因本の独自異文が目につく。すなわち、「ひきふたぎ」が能因本では「引きつくろひ」、うしろから3行目の「わが心ながら」が「われながら」、「出でしにか」が「出でにしぞ」、うしろから2行目の「いみじきには」が「いみじきに」、また、「何をかは」が「何事か」、といった径庭を見せるのである。

総じて、前田本は能因本に拠ったとするには、支障となる事象である、と言うほかはないであろう。

さて、最終行、「ささげつる」の「つる」は、三巻本・能因本ともに「たる」とするが、前後の文脈に徴して、清女の置かれた状況や抱えた情意を想えば、「たり」よりは、彼女の意志性を反映する「つ」のほうが格段に優るであろう。前田本が再編集本であるとするならば、その際の推敲・改変の介在を想定してよい事象である、と言ってよいであろうか。

また、8頁1行目の「髪のあやしささへ思ふに」を、三巻本は「髪のおぼえさへあやしからむと思ふに」に作る。これなども、雑纂本系の本文から類纂本系のそれへと改変された可能性を感じさせて余りある事象では、と考えるのだが、それにつけ、改めて気になるのは、同じ雑纂本系統内における三巻本本文と能因本本文との関係性である。本文の伝写・伝来の一筋縄では説けないことを、今さらながらに痛感させられるのである。

2行目、「やつれてこそ」を三巻本は「こそは」、「立ちたまはなむ」を能因本は「立ちたまへ」と、それぞれ伝える。後者については、能因本―前田本間でのニュアンスに相応の懸隔があることと、ここでは前田本が能因本を直ちに継承してはいないこととを確認しておくべきであろう。

3行目、「誰が描きたるぞ」の「描き」を「かかせ」とすること、「袖を顔におしあてて」の「顔に」を持たぬこと、さらに、「うつぶしたるも」の「も」を「裳」と把捉すること、こんにちの校訂本においては、三巻本・能因本およそ共通である。[3] 他方、「賜はねば」を能因本は「立ちたまはねば」と伝える。能因本本文によっても日本語としては通じようが、文脈はそれでよいのか、疑問なしとしない。前行に続いてここでも、前田本がその能因本本文を継いではいないこと、強調しておきたい。

最終行、「まだらくらむ」を、三巻本は「まだらに（まだらィ）ならむ」、能因本は「またくらむ」と伝える。三巻本の「まだらならむ」が、「意改のおそれがないとはいえない」[4] 表現であり、能因本は能因本で、文意普通であるとともに前田本の「まだらくらむ」からの派生であるかのような文字列であることに鑑みれば、前田本のみが、かろうじて原初性を保持し来たったとも言えよう。たとえば、前田本の「まだ

らく」は、「まだらになる」の意の「もどろく」が転訛したものではないか、すなわち、「もどろく」に漢字が当てられ「斑く」と表記され、それが再び仮名によって書記されて「まだらく」を生んだ、というように辿り得るであろう、と考えてみるのである。

一九　前田本を読む／前田本で読む ～三〇一段終盤の場合～

〔三〇一〕（その3）

【本文】

久しうゐたまへるを、苦しう思ふらむと御心得させたまへるにや、「これ見たまへ。これは誰が描きたるぞ」と聞こえさせたまへば、うれしと思ふに、「賜はりて、見はべらむ」と啓したまへば、「なほ、ここへ」とのたまはするを、「人の、とらへて立てはべらぬなり」とのたまふ、いといまめかしう、身のほどにはあはず、かたはらいたし。人の草仮名など書きたる草子とり出でて御覧ず。「誰がにかあらむ。かれに見せさせたまへ。それぞ世にある人の手は見知りてはべる」など、ただいらへさせむと、あやしきことどもをのたまふ。

一所だにあるに、前駆うち追はせて、同じ直衣の人まゐりたまふ。これはいま少しはなやぎ、猿楽言などし、ほめ、笑ひ興じ、われも、「なにがしが、とあること、かかること」など、殿上人のうへなど申すを聞くは、なほ、いと変化の人などの下り来たるにやとおぼえしを、さぶらひ馴れ、日ごろ過ぐれば、いとさしもあらぬわざにこそはありけれ。

【通釈】

大納言が長いこと傍にいらっしゃるのを、わたしがつらがっているだろうとお察しあそばされたのか、中宮は「こちらをご覧になって。これはどなたが描いたのかしら」と申し上げなさるので、うれしい援け舟と思っていると、大納言は「こちらにいただいて、拝見しましょう」と中宮に申し上げなさるものだから、中宮が「いえ、やはり、こちらへ」とお促しになったのに対して、「この人が、つかんで立たせてくれないのです」と大納言がお応えになったのは、いかにも現代風で若々しく、わたしには分不相応に感じられて、いたたまれない思いである。中宮は誰かが草仮名などを書いた草子を取り出してご覧になる。「どなたの筆跡ですかね。そちらの人にお見せになったらよい。彼女なら世間にありとある人の筆跡は見知っておりましょう」などと、私に何が何でも応答させようと、大納言はおかしなことをおっしゃる。

大納言お一人でさえこうして持て余しているのに、先払いの声をかけさせて、同じような直衣姿の人が参上なさる。こちらは大納言よりは陽気で、軽口を飛ばしたり、女房たちを褒めたり、笑ひ興じたりし、女房たち自身も、「誰それの、ああしたこと、こうしたこと」などと、殿上人の身の上などを申し上げるのを聞くと、まるで、ほんとうに変化のものなどがここに降り来ているのではと感じられたのだったが、宮仕えに馴れ、何日も過ぎてみると、決してそれほどでもないことなのであった。

かく見る人びとも、家のうち出でそめけむほどは、さこそはおぼえけめ、かくしもてゆくに、おのづから面馴れぬべし。

物など仰せられて、「われをば思ふや」と問はせたまふ。御いらへに、「いかがは」と啓するにあはせて、台盤所の方に鼻をいと高くひたれば、「あな、心憂。そらごとを言ふなりけり。よし、よし」とて、入らせたまひぬ。いかでかそらごとにはあらむ、よろしうだに思ひ聞こえさすべきことかは、鼻こそそらごとはしけれ、とおぼゆ。さても、誰、かくはにくきわざをしつらむと、おほかた心づきなしと思へば、我がさるをりもおしひしぎ、隠してあるものを、ましてにくし、と思へど、まだうひうひしければ、ともかくもえ啓しかへさで、明けぬれば下りたる、すなはち、浅緑なる薄様に、艶なる文を持て来たり。見れば、

「いかにしていかで知らまし偽りをそらにただすの神なかりせば

となむ、御けしきは」とあるに、めでたくも口惜しくも思ひ乱るるに、なほ、昨夜の人ぞ訊ねも聞かまほしき。

「淡さ濃さそれにもよらぬはなゆゑにうきみのほどを知るぞわびしき

なほ、こればかりは、啓しなほさせたまへ。式の神もおのづからも。かしこし」とてまゐらせて後、うたて、をりしも、さはたありけむと、いと歎かし。

わたしが今こうして驚嘆のうちに見る女房たちも、初めてそれぞれの家を出たころは、間違いなくそんなふうに感じたであろうが、このようにお仕えしてゆくにつれ、おのずと馴れて厚かましくなってしまうのであろう。

何かを話題にされて、「わたしのことを大切に思ってくれているか」と中宮がお訊ねになった。ご返事として、「思わないはずがございません」と申し上げるのと同時に、台盤所のほうで誰かがかなり大きくしゃみをしたので、中宮は「まあ、いやだ。嘘を言ったのね。もうよい、もうよい」とおっしゃって、奥にお入りになってしまった。どうして嘘などであろうか、それなりに大切にとさえ思い申し上げるようなこととてない、鼻のほうこそが嘘をついたのだ、と思う。それにしても、いったい誰が、こんな憎らしいことをしたのかと、また、だいたいくしゃみというものは気に入らないと思うから、自分が出そうなときも押しころし、出ないようにしているのに、こうあってはますます憎たらしい、と思うけれど、新参早々なので、どうもこうも弁解申し上げられずに、夜が明けたので局へ下がった、するとすぐに、薄緑色の薄様の紙に書かれた、見るからに心をひきつけられる手紙を使いが持って来た。開けて読んでみると、

「どんな方法によって、そしてまた、なんで、知ることができましょう、天に、証拠もなしに真偽を判断する糺の神がいらっしゃらなかったなら。

と、中宮のお考えはこのとおりです」とあるので、すばらしいとも残念とも心乱れて思うにつけても、やはり、昨夜のくしゃみをした人が誰であったか、探し求めて真意を聞き出したいことであった。

「花であるならば、その色の淡さや濃さによって良し悪しを、ことによっては実の生りようまでを含めて知り得ましょう。けれども花ならぬ鼻であっては、わたしの中宮への思いが浅いか深いかの判断と繋がるはずもなく、にもかかわらず、そんな鼻によってこんなつらい思いをしなければならない我が身のほどを知らされるのは、まったくもってやりきれません。

やはり、このたびのことばかりは、ご修正のうえ言上なさってください ましょう。式の神もこのままでもお分かりくださるとは思いますが。畏れながら」としたためてご返事を差し上げた後も、不愉快だ、あのような折も折、あんなことがなんでまた起きたのだろうと、ほんとうに泣きたくなるくらいだ。

章段の終盤である。まずは本文に施した校訂について。【本文】6行目の「書きたる」の「たる」は、底本では「たり」だが、「り」は「る」を誤写したものと見て、また、つづく「草子」に掛かりゆく文脈を形成すべきが至当と判断して、「たる」に改めた。

さて、異同だが、1行目、「ゐたまへるを」は、能因本が「ゐたまひたりつるを」、「苦しう思ふらむ」は、三巻本が「心なう、苦しと思ひたらむ」、能因本が「ろんなう苦し」とする。また、「御心」の「御」は、三巻本・能因本ともにこれを持たない。

2行目の「描きたるぞ」は、三巻本が「手ぞ」と伝える。この異同も興味深い。

2〜3行目の「聞こえさせたまへば」の「たまへば」を、三巻本・能因本ともに「たまふを」と、12頁1〜2行目の「啓したまへば」の「啓し」を、やはり三巻本・能因本ともに「申し」とそれぞれ伝え、ここの「たまへば」も、三巻本では「たまふを」である。これもまた、留意したい事象である。

4行目、「のたまはするを」は、三巻本は「のたまはす」で句点とし、能因本は「のたまはすれば」とする。また、「人の」は、三巻本・能因本ともに「人を」に作る。どちらでも文意は通るが、状況に照らして、より理に適った助詞は、どちらであろうか。前田本は、ここでも無視し得なかろう。

5〜6行目、「身のほどにはあはず」を、能因本は「身のほど、年齢（とし）にはあはず」と伝えるが、他本に徴して、「年齢」は後人の恣意的な増益ではあるまいか。読者・書写者を広汎に獲ていたであろう能因本の、逆にそれがための或る種の危うさが想われるところである。

8行目、「見知りてはべる」の「はべる」についても、三巻本・能因本が揃って「はべらむ」とする。また、それにつづく「など」以下を、能因本は「あやしき事どもをただいらへさせむとのたまふ」と伝える。例によって、前田本の能因本依拠を述べたてようとする場合には、明らかに反証となる事象である。

うしろから6行目、「前駆」の前に、三巻本・能因本ともに「また」を置く。また、「まゐりたまふ。」を、三巻本は「まゐりたまひて」、能因本は「まゐらせたまひて」と伝える。

うしろから5行目の「猿楽言などし」の「し」を、三巻本は「したまふを」、能因本は「うちし」に作る。また、「ほめ」を三巻本は持たない。

同じく4行目の「かかること」、これも三巻本は有していない。

同じく3行目、「申す」を三巻本は「申したまふ」とする。前田本とは主語が異なる可能性ないし恐れを孕む。三巻本はまた、「いと」

を持たない。さらに、「変化の人」は、三巻本・能因本では、「変化のもの、天人」ないし「変化のもの天人」である。

最終行、「さしもあらぬ」の「あらぬ」を、能因本は「なき」に作るが、「あらぬ」が一般的であろう。

12頁の2行目、「…おぼえけめ、かくし…」の箇所を、三巻本は「…おぼえけめなど観(くわん)じ…」、能因本は「…おぼえけめ、とかくして…」と伝える。これなども、前田本の伝える文字列が「かく／し／もてゆく」と分解し得ることを把握できなかった何人(なんびと)かが、恣意的に立てた本文が能因本の伝えるそれであり、一方で、「かくし」の「く」を「ん」と誤った結果としての本文が三巻本の伝えるそれなのではあるまいか、と考えるのである。その意味では、ここでも、前田本の伝える文字列が或る種の原初性を包蔵している可能性を指摘し得よう。

やはり、前田本はさらに具(つぶさ)に読まれねばならない、そう考えるのである。

引きつづき、以下の行文についても見ていこう。能因本は、4行目の「いかがは」を「いかにかは」、次いで、うしろから5行目の「そらごとを言ふ」を「そらごとする」に、それぞれ作る。

三巻本は、6行目の「入らせ」の前に「奥へ」を、また、7～8行目の「鼻こそそらごとはしけれ」の前に「あさましう」を、それぞれ置く。

さらに三巻本は、8行目で、「おぼゆ」を「思ふ」とするほか、「誰」以下を、「誰か、かくにくきわざはしつらむ」と伝える。この、「誰」のあとに「か」を伴い、逆に、「かくは」の「は」を持たないのは、能因本も同じである。三巻本・能因本共通という意味では、最終行の「思へば」を両本ともに「おぼゆれば」と伝えている。なお、「我が」を三巻本は持たない。

また、9～10行目の「おしひしぎ、隠して」を、三巻本は「おしひしぎつつ」、能因本は「おしひしぎ返して」とし、さらに能因本は、そのあとの「あるものを」の「ものを」を持たない。なお、「にくし」を、三巻本は「いみじ、にくし」に作り、「いみじ」を有したうえで「にくし」と並列する。

11行目、「啓しかへさで」を、能因本は「啓しなほさで」とする。また、三巻本は、「持て来たり」の前に「『これ』とて」を、「見れば」の前に「あけて」を、それぞれ置く。

うしろから9行目の歌中の「いかで」、これを三巻本・能因本ともに「いかに」と伝える。「いかに」のリフレインを多とする向きもあるだろうが、「どのようにして、どういう方法で」の意の「いかにして」につづくこの位置では、「なぜ、いったいどうして」の意を形成したものと思しく、その点では「いかで」がより妥当だろうと考えるのだが、いかがであろうか。

うしろから6行目の「訊ねも聞かまほしき」を、三巻本は「ねたくにくままほしき」に作り、さらに次行、歌の結句の「知る」を、これまた三巻本は「見る」に作る。いずれも興味深い。

なお、「昨夜」について念のため言い添えておけば、底本の「よべ」は、字母が「夜部」である。すなわち、「夜」は漢字ではなく、「夜」を字母とする変体仮名である。

つづいてうしろから3行目、三巻本は「こればかりは」の「は」を持たず、逆に、「まゐらせて後」の後に「にも」を置く。

しかるに、それ以上に興味を惹き、また留意したいのは、先ほどの「いかに」―「いかで」と同様に、雑纂本対前田本の図式を描く異同のありようである。すなわち、うしろから3～2行目にかけての「おのづからも」の「も」を、三巻本・能因本はともにこれを持たず、逆に「かしこし」の前には、ともに「いと」を置き、さらにはうしろから2行目、「さはた…」の前にはともに「などて」を配しているのであった。

意を留めたいのは、単純に、前田本の独自異文の多さ、ということではなく、その独自異文のありようから想像される、雑纂本的なる本文から前田本的なる本文が再編集・再構成されたと仮定することのできる蓋然性の高まりであり、その再編集・再構築に伴って細部の改変が為されたであろうと考え得る可能性の展がりである。

二〇　前田本を読む／前田本で読む　～三〇二段の場合～

〔三〇二〕

【本文】

大納言殿(5)まゐらせたまひて、詩文のこと奏したまふに、例の、夜いたう更けぬれば、御前なる人びと、一、二人づつうせて、御屏風・御几帳のうしろ、小戸屋などにみな隠れ臥しぬれば、ただ一人になりて、眠たきを念じてさぶらふに、「丑四つ」と奏すなり、「明けはべりぬなり」とひとりごつを、大納言殿、「い

【通釈】

大納言殿が参上なさって、帝に漢詩文のご講義を申し上げなさっていると、いつものように、夜がたいそう更けたので、御前に伺候している女房たちは、一人、二人と場を離れ、御屏風や御几帳の陰、もしくは各人の仕切り部屋に隠れるようにして横になってしまったので、わたしはたった一人になって、眠たいのをこらえてお控え申していると、「丑四つ」と役人が奏上しているようで、それを耳にしてわたしが「夜が明けたようだわ」とつい独り言をもらすと、大納言殿が、「今となっては、お休みなさいま

まさらに、な御殿ごもりおはしましそ」とて、寝べきものともおぼしたらぬを、うたて、何しに申しつらむ、と思へども、また人のあらばこそまぎれもせめ、上の御前の柱に寄りかかりて少し眠らせたまふを、「かれ見たてまつらせたまへ。いまは明けぬるに、御殿ごもるべきことかは」と申させたまへば、「げに」など宮の御前も笑ひ申させたまふも知らせたまはぬほどに、長女が童の、鶏をとらへ持てきて、「あす、里へ持ていかむ」と言ひて隠しおきたりけるが、いかがしけむ、犬見つけて追ひければ、廊の間木に逃げ行きて、おそろしく鳴きののしるに、みな人起きなどしぬなり、上もうちおどろかせおはしまして、「いかでありつるぞ」など訊ねさせたまふに、大納言殿の、「声、明王の眠りをおどろかす」といふ詩を高ううち出だしたまへる、めでたうをかしきに、ただ人の眠たかりつる目も、いと大きになりぬ。「いみじきをりのことかな」と、宮も上も興ぜさせたまふ。なほ、かかることこそめでたけれ。

またの日は、夜の御殿に入らせたまひぬ。夜中ばかりに、廊に出でて人呼呼べば、「下るるか。いで、我送らむ」とのたまへば、裳・唐衣は屏風にうち掛けて行くに、月のいみじう明かくて、御直衣のいと白う見ゆるに、指貫を長く踏みしだきて、袖をひかへて、「倒るな」と言ひて率ておはするままに、いみじ。「なほ、残りの月に行く」と誦じたまへる、また、いみじうめでたし。「かやうのこと、めでまどふ」とて笑ひたまへど、いかでか、なほ、いとをかしきものをば。

すな」とおっしゃって、寝る要があるようには感じておいでではないので、しまったな、なんであんな独り言を申し上げてしまったのだろう、と思うけれども、ほかの女房がいるのならばごまかせもしようがそういうわけにもいかず、帝が柱に寄りかかってうとうととお眠りあそばすのを、「あれをご覧なさいませ。すでに夜は明けたのに、お休みになってよろしいものでしょうか」と中宮に申し上げなさると、「いかにも」などと中宮もお笑い申し上げあそばすけれども帝はお気づきあそばさずにいると、長老女官の使う童女が、鶏を捕まえて持ってきて、「あした、実家へ持っていこう」と言って隠しておいたのが、どうしたのだろう、犬が見つけて追いかけたので、廊の上長押の棚にまで逃げていって、けたたましく鳴き騒ぐので、女房たちはみな起きたりなどしたようで、帝も目をお覚ましあそばして、「いったいどうしたというのか」などお訊ねあそばすと、大納言殿が、「声、明王の眠りを驚かす」という詩句を高らかに吟誦なさった、それが何ともおもしろかったので、わたしごときの眠たかった目も、それはそれは大きく開いた。「いかにも折に適った詩句でしたわね」と、中宮も帝も興がお乗りあそばす。やはり、こうした当意即妙のやりとりがすばらしいのだ。

翌日は、中宮は帝と一緒にご寝所にお入りあそばした。そこでわたしは退出すべく夜中のころに、廊下に出て下女を呼んでいると、大納言が「局に下がるのか。では、私が送ろう」とおっしゃるので、裳や唐衣は屏風にひょいと掛けて外へ出て行くと、月がたいそう明るくて、大納言の御直衣がとても白く見えるのに加えて、指貫を長くして踏みつけて歩きながら、わたしの袖を引っぱって、「転ぶな」と言って導いてお歩きになるにつけ、すばらしく感じられる。「なほ、残りの月に行く（旅人は、それでも、残月のなかを歩みつづける）」と朗詠なさったのは、これまた、この上もなく優美である。「この程度のことで、そんなに大騒ぎして喜んで」と言って大納言はお笑いになるけれど、どうして、感心せずにいられようか、やはり、すばらしいものはほんとうにすばらしいのだ。

本章段は、三巻本〔二九五〕、能因本〔二九二〕がこれに対応する。堺本には対応する章段は非在である。総じて、文脈の趣意に相違を生じるような異同はなく小異が目立つが、中には大いに留意すべき、もしくは記憶に留めるべきそれも存する。なお、その「小異」には、敬語表現に係るものも多い。ともあれ、以下、取り上げるに足るものを掲出してゆく。

【本文】の1行目、「まゐらせたまひて」を、三巻本は「まゐりたまひて」、能因本は「まゐりて」と伝える。能因本に大納言への直接的敬意表現がないことがやや気になるが、下の「奏したまふ」の「たまふ」が一切を引き受けている構文と見れば、それはそれで論理的には成り立っていると言ってよいのであろう。ただ、いずれにせよ、章段の冒頭から、諸本が三者三様の伝写状況をこんにちに伝えているという事実は興味深い。なお、「詩文（ふみ）のこと」を、三巻・能因両本は、ともに「ふみのことなど」とする。これと同じ事象は16頁の4～5行目にもあって、「宮の御前も」を両本はともに「宮の御前にも」と伝える。前田本本文が再編されたそれであることを物語る事象と言うべきであろうか。

翻って、15頁の3行目、「うしろ」を能因本は「しもへ」と伝える。「下のほうに」の謂いなのであろう。また、三巻本は、「小戸屋（こへや）」と、「ただ一人になりて」の「になりて」を持たない。よって、それぞれ、「御屏風・御几帳のうしろなどに…」、「ただ一人、眠たきを念じて…」との本文になる。

ところで、その、三巻本が持たない「こへや」だが、この語は、かの「御仏名のまたの日」の段にも、

三巻本〔七七〕＝…「さらに見はべらじ」とて、ゆゆしさにこへやにかくれふしぬ。
前田本〔三一五〕＝…「さらに見侍らじ」とて、こへやにかくれてふしぬ。

とあって、語の認定に何らの支障も無いかに思しい。しかるに、ためしに手許の辞書を参看してみれば、その立項・収載の実態は、

日本国語大辞典＝うえーや（うへ）【上屋】《名》禁中（ママ）。清涼殿の上戸（かみのと）に近い女官の詰所。＊春曙抄本枕草子（10C終）七〇・御仏名のあした「これ見よかしとおほせらるれど、さらに見侍らじとて、ゆゆしさにうへやに隠れふしぬ」
小学館 全訳古語例解辞典 ＝ うへーや【上屋】（ウエ）〔名〕天皇の御座所に近い、女官の詰め所。例「ゆゆしさに――に隠れふし

ぬ」〈枕草子・御仏名のまたの日〉訳（地獄絵の）気味悪さに御座所近くの詰め所に隠れて横たわった。

旺文社 古語辞典＝ うへ－や【上屋】―（名）宮中の、天皇の御座所に近い女官の詰め所。「―に隠れふしぬ」〈枕・御仏名のまたの日〉

といったありさまなのである。かつて、「こへや」が不詳ないし未詳とされた時代であればまだしも、そのような時代は疾うに過ぎ、こんにち、たとえば増田繁夫校注『枕草子』（和泉書院、一九八七年）が、同書では【七六】の「御仏名のまたの日」章段中の「小戸屋」について、適確に「戸や壁で間仕切りした部屋。中宮御在所の登花殿内であろう」との頭注を施している事実をわたしたちは知る。してみれば、春曙抄本枕草子の本文に基づいて立項された「うへや」こそ、語彙としての認定要件は十分に備わっていたのかどうか、改めて問われるべきであろうし、問うべきでもあろう。

翻って、前田本の「こへや」は、〔三一五〕のそれも本段〔三〇二〕のそれも、ともに明瞭に「こ」でありながらも、それが下の「へ」へと連綿の体で書写されていたとすれば、いかにも「う」と見誤られる惧れは相応にあったであろうと推し量り得ることをも指し示しているのであった。

果たして、「うへや」は「こへや」の誤写の結果なのではないか。すなわち、辞書に立項された「うへや」の語は、撤回されるべきではないか。前田本の価値は、そうした問いを投げかけ得る文字情報を伝えているところにも存しているのだということを、ここに明記しておきたい。

15頁の最終行、「御殿ごもりおはしましそ」を、能因本は「御殿ごもりおはしますよ」に作る。本章段における最も大きな異同である。能因本は、あるいは数行あとの「上の御前の…少し眠らせたまふを…」との状況と符節を合せようとしての改変の痕跡（あと）ででもあろうか。

16頁の2～3行目、三巻本は、「まぎれもせめ」の「せめ」を「臥さめ」、「寄りかかりて」の「かかりて」を「かからせたまひて」とする。底本が「寄りかかりて」と、そこに敬意表現を持たないのは、下の「眠らせたまふを…」の「せたまふ」に収斂するからで、むしろそのほうが一般的であろう。能因本も同断だが、同本は「せたまふ」を「せたまへる」に作る。

3～4行目、「見たてまつらせたまへ」を、能因本は「見たてまつりたまへ」と、いわゆる最高敬語ではなく表現する。また、「御殿ごもるべきことかは」（三巻本は、「御」を「大」に作り、「こと」を持たない）の前に、三巻本は「かう」を、能因本は「かく」を、それ

ぞれ置く。さらに能因本は、「…と申させたまへば」を「…と申させたまふ」と伝え、ここで句点の呼吸である。

5行目、「御前も」の「も」は、三巻本・能因本では、ともに「にも」である。また、三巻本は、「笑ひ申させたまふも…」の「申させ」を「きこえさせ」、下の「あす、…」を「あしたに…」と、それぞれ伝える。

6行目、「持ていかむ」は、能因本では「行かむ」のみである。また、能因本は、8行目の「間木」を「さき」とするが、「さ」（字母「左」）は「ま」（同「万」）を誤って写したものであろうか。

8～9行目、三巻本は、「逃げ行きて」を「逃げ入りて」に作り、「…おはしまして…」を「…たまひて…」と伝える。

9～10行目、「いかでありつるぞ」を、三巻本は「いかでありつる鶏ぞ」に、能因本は「いかにありつるぞ」に、それぞれ作る。先の、「いかにして…」の中宮詠に見られた「いかに」―「いかで」の異同が、語彙を逆転させて能因本―前田本間にあらわれている恰好である。また、11行目の「…といふ詩」を、三巻本は「…といふこと」と伝える。

12行目、「ただ人の」の箇所を、能因本は「一人」とする。これは、能因本の或る段階の書写者が、「（明）王」に対する表現としての「ただ人」の持つ意味合いを解し得ぬままに、先の「ただ一人になりて」に曳かれたか、あるいは「人（ひと）の」の「の」を誤って「り」としたかして、やがて「一人」との漢字表記へと移ろった、というような伝写過程を経たのではあるまいか。もしそうだとすれば、この異同もまた、前田本が能因本由来であるとすることの反証の一つに加えることができるであろう。

13行目の「宮も上も」については、三巻本は「うへも宮も」と伝え、「宮」と「上（うへ）」とが逆位であり、能因本は「宮も」のみで、「上も」を持たない。伝本三者の相違を語るうえで、いかにも興味深い事象であると言えよう。

さて、うしろから8行目、「またの日」を、三巻本は「またの夜」とする。直後の「夜の御殿」との重なりには、引っかかるものが残ろう。また、三巻本は、「入らせたまひぬ」を「まゐらせたまひぬ」に作る。二者すなわち帝と中宮とに敬意を払う表現である。さらに、うしろから7行目の「いで、我送らむ」については、能因本は「いで」を、三巻本は「我」を、それぞれ持たない。いきおい、前田本は三巻本本文と能因本本文とを抱き合わせにしたとの説明が合理的につけられそうな事象だが、翻って、前田本が、再編集による、具足せしめられた表現を伝えているのだとしたらどうか。即断は、いずれにしても許されないところであろう。

うしろから5行目、「指貫を長く踏みしだきて」を、能因本は「指貫のなから踏みくくまれて」に作る。田中『全注釈』は「指貫が半分（足で）踏み包まれ（るような格好をし）て」との解釈を示すが、その解釈から本文へと還元できるものとは思えず、いかにも苦しい理解と

言わざるを得まい。また、「率ておはするままに」の「率て」を三巻本は持たない。

ところで、［注］の（6）で触れた、【本文】うしろから4行目の「いみじ」についてである。これが「いうし（遊子）」からの誤写である公算の大きさは当該の［注］で述べたとおりだが、一方で、「旅人」の意の「遊子」を、場にそぐわぬことをもって前田本が引用句から外した可能性も無ではあるまい。後攷に俟ちつつ、前田本本文の可能性を残しておきたい。

二一　前田本を読む／前田本で読む　～三〇三段の場合～

〔三〇三〕

【本文】

僧都の君の御乳母、御匣殿とこそ聞こえめ、ままの局にゐたれば、男のある、板敷のもと、いと近く寄り来て、「からい目を見たまへる、誰にかは愁へ申しさぶらはむ」とてなむ、泣きぬばかりのけしきにて言ふ。「何事ぞ」と問へば、「あからさまにものにまかりたりしほどに、汚く侍るところの焼け侍りしかば、日ごろは寄居虫の、人の家どもに尻をさし入りてなむさぶらふ。(7)馬寮の御秣積みて侍りける家より出でまうできて侍るなり。ただ垣を隔てて侍れば、夜殿に寝て侍りけるわらはべも、ほとほと焼け侍りぬべくてなむ、いささか物も取うで侍らず」など言ふを、御匣殿も聞きたまひて、いみじく笑ひたまふ。

みまくさをもやすばかりぞ春のひによどのさへなど残らざりけむ

と書きて、「これを取らせさせたまへ」とて投げやりたれば、笑

【通釈】

僧都の君の御乳母が、他でもない御匣殿をお相手にお話し申し上げるのであろう、自身の局にいたところ、下男が、縁側のそばに、たいそう近くに寄って来て、「ひどい目に遭いましたのですが、どなたにおすがり申せばよいのやらと思いまして」と、今にも泣き出さんばかりのようすで言う。わたしが「どうしたのか」と問うと、「ほんのちょっと外出しておりました間に、むさ苦しく住んでおりました家が焼けてしまいましたので、ここ何日かは寄居虫さながらに、他人様のお宅に尻をさし入れるように居候しております。馬寮の御馬草を積んでございました家から火が出てまいってございます。ただ垣根ひとつを隔てた隣でございますので、寝室で横になっておりました私めの妻も、危うく焼け死んでしまいますところで、まったく何も持たずじまいでございました」などと愚痴を並べるのを、御匣殿もお聞きになって、たいそうお笑いになる。

草を萌え出させる程度か、と思われた春の陽光によって、どうして淀野一帯まで残らず萌えたのだろうか、と訝しくなるように、御秣を燃やす程度か、と思われた春の日中の出火によって、どうして夜殿まで残らず燃えてしまったのでしょうか。お気の毒なこと……。

と書いて、「これを受け取らせてくださいな」と言ってぽんと放るようにして与えてやると、女房たちは嬉々として騒ぎたてて、「あそこにいらっしゃ

ひののしりて、「そこにおはする人の、家焼けたりといとほしがりて、賜ふめる」とて取らせたれば、「何の御短冊にか侍らむ。ものいくらばかりにか」と言へば、「まづ、読めかし」と言ふ。「いかでか。片目もあきつかうまつらでは」と言へば、「人にも見せよ。ただいま召せば、とみにて上へ参るぞ。さばかりめでたきものを得ては、何をか思ふ」とてみな笑ひてまどひのぼりぬれば、「人にや見せつらむ。さと聞きて、いかに腹立たむ」など、御前に参りてままの啓すれば、また笑ひさわぐ。御前にも、「など、かくものぐるほしからむ」と笑はせたまふ。

本章段は、三巻本〔二九六〕、能因本〔二九三〕がこれに対応する。冒頭の空間に係る表現に大きな径庭がある以外は異同は概ね小異にとどまる。例によって、以下、そのうちの主だったところを掲出してゆく。なお、当章段についても、堺本には対照し得る章段は非在である。

先ずは【本文】の冒頭、「僧都の」から「ゐたれば」までを、三巻本は「僧都の御乳母のままなど御匣殿の御局にゐたれば」と伝える。それに拠れば、「僧都」すなわち道隆の四男隆円僧都の育ての親たる「御乳母」が、「御匣殿」すなわち道隆の四女の御局にいたことになるが、「御乳母」と「まま」との重なりに不自然さがあるのではと思しいが、一方で能因本も、それとほぼ同文を伝える当前田本も、問題なしとしない。いま、右には、「…とこそ聞こゆ」を定型的な構文とは見ないかたちでの解釈を試みたが、なお後攷に俟ちたい。

2行目、「いと近く」の「いと」を、三巻本・能因本ともに持たない。意味内容に実質的な差異は生じないが、前田本の表現が、「板敷のもと」と先ず広く言い、次いで「いと近く」と焦点化する、空間の指示表現に係る古文特有の構えを見せている点には意を留めておきたい。

2～3行目、「見たまへる」は、三巻本では「見さぶらひて」、能因本では「見さぶらひつる」と伝え、下の「申しさぶらはむ」については、三巻本が「申しはべらむ」とする。前段〔三〇二〕でも触れたが、敬語に係る語彙の選び択りには、三本区々たる様相を見せる

るお方が、あなたの家が焼けてしまったと聞いて可哀想に思って、これを下さったようですよ」と言って与えたところ、「これは何を頂戴できるお書付けでございましょうか。それはいくらくらいなのでしょう」と言うので、「なにはともあれ、読んでみなさいな」と言う。と、「無理でございます。文字一つ拝読できかねます私めのような者には」と応えるので、「誰かにでも見せて読んでもらいなさい。わたしたちは今しがたお召しがあったので、急いで中宮のところへ参らねばなりません。そんなにすばらしいものを手に入れたというのに、何を思ってそんなふうにぼかんとしているの」と言って皆で笑いながら慌ただしく参上すると、「あの文を誰かに読んでもらったのかどうか。書いてあることがそうだと分かって、どんなに腹を立てるでしょう」などと、御前に参上して乳母が申し上げたところ、中宮方の女房もまた笑って騒ぎたてる。中宮におかれても、「どうして、そんなに羽目を外すのでしょう」と言ってお笑いあそばす。

とが多い。なお、「…さぶらはむ』とてなむ」の文字列にも差異があり、三巻本は「なむ」を持たず、能因本は「…さぶらはむとてなむ』と」に作る。

4～5行目、「言ふ」を三巻本は持たない。「汚く」についても、三巻本はこれを持たず、能因本は「汚き」に作る。三巻本は誤脱であろう。また、「…侍りしかば」は、三巻本では「…はべりにければ」、能因本では「…はべりにしかば」と伝える。

5～6行目、「日ごろは」は三巻本には非在、「寄居虫の」は、三巻本・能因本ともに「寄居虫のやうに」と、「やうに」を有する。それを持たない前田本の「の」は、しかし、それのみで「…のように」の意を生成し得るはずで、「やうに」の誤脱とするには当たらないであろう。また、「…入りてなむ」の「なむ」を三巻本は「のみ」に、「御秣」を能因本は「みくさ」に、それぞれ作る。

うしろから5行目。「…焼け侍りぬべくて…」の「侍り」を、三巻本は持たない。また、「取(と)うで」だが、諸注釈書に「取(と)う出(で)」とするが、如何。次の「はべらず」への接続に難があろう。こんにち言うところの「取って」を、ウ音便をもって表現したのが「取うで」ではあるまいか。

うしろから5～4行目の「言ふを」は、三巻本では「いひをるを」で読点、能因本では「言ひをる」で句点の構文である。

うしろから3行目、一首の第二句「もやすばかりぞ」の「ぞ」は、三巻本・能因本ともに「の」、結句「残らざりけむ」は、これも両本ともに「残らざるらむ」と伝える。これも、前田本の改編の証しの一つか。

20頁最終行の「取らせさせたまへ」、これは、「取らす」ことを「させ」なさいの謂いとなる構文だが、「取らす」が使役の意味を内包しているとすれば、「させ」は無くともよいか。現に、三巻本・能因本本文は「取らせたまへ」である。

21頁の1行目、「そこにおはする人」の「そこに」を、三巻本は「この」、能因本は「そこら」に作る。能因本は、意味こそ通じるが、なめらかな文脈は形成し得なかろう。また、「家焼けたり」の「たり」を、三巻本は「たなり」と、伝聞推定の「なり」を用いて表現する。

2行目、「賜ふめる」の「める」、これも三巻本は独り「なり」に作り、さらには下の「何の」以下の下男の発言の前に、「ひろげてうち見て」との下男の動作に係る表現を置き、発話そのものも、「これは」から始まる。なお、「短冊(たんざく)」を能因本は「たんじやう」と伝えるが、「う」（字母「宇」）は「く」（同「久」）を誤写したのでもあろうか。

3行目の「まづ」、これは、三巻本では「ただ」である。

6行目、「笑ひてまどひのぼりぬれば」は、言うまでもなく「笑ふ」＋「まどひのぼる」だが、三巻本ではこれが「笑ひまどひのぼり

ぬれば」とあって、「笑ひまどふ」＋「のぼる」と解され、能因本は能因本で「笑ひてまどひてのぼりぬれば」と伝えており、これは、「笑ふ」＋「まどふ」＋「のぼる」と解することになろう。文脈上、もっとも滑らかなのはいずれか。言うまでもあるまい、前田本は、やはり、軽視されてはならない存在なのである。

なお、うしろから3行目の「さと聞きて」を、三巻本は「里に行きて」に作る。萩谷『集成』などはそのままに「家に帰ってから」との解釈を施すが、不自然さは否めまい。石田『角川』が「能因本、前田本により訂す」としたのを多としたい。

ところで、本章段における女房たちの笑いは、「男」の「愁え申し」が、

おもしろき野をばな焼きそ古草に新草交り生ひは生ふるがに　（万葉集・巻十四・三四五二）

春日野はけふはな焼きそ若草のつまもこもれり我もこもれり　（古今集・巻一・春歌上・一七・よみ人しらず）

武蔵野はけふはな焼きそ若草のつまもこもれり我もこもれり　（伊勢物語・十二段）

といった歌うたを想起させるに足る内容であると知悉し得たこと、そこから清女が、

焼かずとも草はもえなむ春日野は ただ春の日にまかせたらなむ　（古今六帖・第六・草・春草・壬生忠見）

の一首をふまえて「みまくさを…」と詠んで、「いささか物も取うで侍らず」との物言いの言外に「男」が込めた物乞いの内意に見事に応じたと見做し得たこと、にあったと読むべきなのであろう。[8] 何らかの物品の下賜ないし状況の提供を冀い願った「男」の心と言葉とに、或る意味で的確に見合った、同情の一首が作られ与えられたことを、彼女たちは嬉々として囃したてたのである。ただし、いささかその度が過ぎた、それを窘めたのが掉尾での中宮の一言であり、笑いであった。

ただし、その中宮の言動の手前で点綴された人物のそれもまた、というよりもそれこそは、軽々に読み流してはならないのであろう。蚊虻である「男」が、誰かに一首を読んでもらったなら、さぞや腹を立てるだろう、と、一首が与えられたことはそれとして、その「短冊」の中身が「男」の望むものとは遠くかけ離れているという事実に基づいて、「男」の心情に独り思いを遣ったその人こそ、「僧都の君

の御乳母」なのであった。

彼女を冒頭に主語として確と立てて章段を開扉する前田本本文のありようは、右の意味合いにおいて改めて見つめなおされねばなるまい、そう考えるのである。

二二　前田本を読む／前田本で読む　〜三〇四段の場合〜

〔三〇四〕

【本文】

「まことや、加賀へ下る」と言ひたる人に、
思ひだにかからぬ山のささまくらたれかいぶきのさとはつげしぞ

【通釈】

「事実なのですか、加賀の国へ下向するというのは」と言っていた人に対して、
わたしは全く思いもかけていないのに、いったい誰が、わたしがそうだと知らせた、すなわち伊吹の山里を通って加賀へと向かう旅に出ると告げ知らせた、などと言ったのでしょうか。

本章段は、三巻本では本篇の最終章段にあたる〔三〇〇〕、能因本では〔二九六〕がこれに対応する。堺本には対照し得る章段は非在である。見られるとおりの短小章段だが、次に掲げるように、三本間の径庭はかなり大きい。

1行目、冒頭の「まことや」は、三巻本では「まことにや」である。また、「加賀へ」を、三巻本は「やがては」、能因本は「高野」と伝える。さらに、「言ひたる」の「たる」を、能因本は「ける」に作る。

2行目、一首の腰の句「ささまくら」を、三巻本は「させも草」、能因本は、田中『全注釈』は「させもぐさ」と校訂するが、同書の底本は「篠枕」、同系統他本は「さゝ枕」と伝えている。惟みるに、三巻本の伝える「させも草」こそは一首において何らの機能も果たしていないのではと思しく、下の「いぶき（伊吹）」に引っぱられての、後人の恣意的な改変なのではあるまいか。

また、一首の第二句の「かからぬ山の」の「かか」に「加賀」が響くとも見られることからすれば、前田本の「加賀へ」は、そう軽々に一掃・排除してよいものではあるまい。むしろ、「まことやかゝへ」との文字列が伝写される過程で、誤写を含んで派生的に生み出さ

れたものとして三巻本なり能因本なりの本文を見つめ直してみる眼を持とうとすることも、こんにち求められる、諸本を相手にする際の態度なのではあるまいか、とも思うところである。

［注］

（1）底本は、冒頭の「宮に」の左傍に「正暦二年冬」と小書きする。ちなみに、清女の初宮仕えの時期については、これまでに、正暦二年（九九一）十二月説、正暦三年説、正暦四年新春説、正暦四年十月以降説などがおこなわれてきたが、定解・定説を得ていないこと、知られるとおりである。

（2）京都大学国語国文資料叢書『応永本 和泉式部物語 京都大学蔵』（臨川書店、一九七八年）所収の影印本二ウ（同書六頁）の2行目参照。

（3）三巻本は第一類のいわゆる陽明文庫本を底本とする、たとえば田中重太郎『校注 枕冊子』（笠間書院、一九七五）は、「…うつぶしゐたる、裳（も）、唐衣に…」との本文、また、能因本はいわゆる三条西家旧蔵本を主底本とする田中重太郎『枕冊子全注釈 三』（角川書店、一九七八年）は、「…うつぶしふしたる、裳（も）・唐衣に…」（同書四〇一頁）との本文である。

（4）松尾聰・永井和子校注・訳『枕草子』（日本古典文学全集11、小学館、一九七四年）三三三頁の頭注一二を参照されたい。

（5）この「大納言殿」についてであろう、底本は「大納言まいら」の文字列の左傍に「正暦三年九月已後五年八月廿一日以前」との注を小書きする。

（6）この「いみじ」は、底本が書記した「いみじく」の「く」を見セ消チにするのに従った。その「く」は、「…いみし」との文字列から惰性的に連綴されたかとも思しいが、そもそもの「いみし」が、「遊子」を比定し得る「いうし」（「うし」の字母「宇之」）を誤写したものとも考えられる。

（7）この「さぶらふ」だが、底本は「らふ」の右傍に「御馬草事」と小書きする。少しあとに現れる「みまくさ」についての傍注と思しいが、ともあれ、本行本文には関わらぬものと見て、事実上、無視した。

（8）圷美奈子「『枕草子』「僧都の君の御乳母、御匣殿とこそは」の段の機知 ―野の草と「つま」―」（『和洋女子大学紀要』第五十二集、二〇一二年三月）が本章段の要所・要点を押さえながら論じていて参考になる。就いて読まれたい。